

研究主題「身近な地域の学習において、地域に対する理解を深め、 地域に対する関心をもつ生徒を育てるための学習活動の工夫」

東京都教職員研修センター研修部専門教育向上課
青梅市立泉中学校 教諭 市川 敦子

研究のねらい

1 研究主題設定の理由

今日、生活様式の変化によって、個人と地域社会との結び付きが弱まり、人々の地域社会の一員としての自覚が薄れてきている。

このような社会的な背景の中で、平成 20 年 1 月の中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について答申」現行学習指導要領の理念では、「身近な地域社会の課題の解決にその一員として主体的に参画し、地域社会の発展に貢献しようとする意識や態度をはぐくむこともますます必要となっている。」と指摘している。

また、中学校社会科地理的分野の改善の具体的事項として、「地図の読図や作図などの地理的技能を身に付けさせることを一層重視するとともに、身近な地域の調査の学習において、諸課題を解決し地域の発展に貢献しようとする態度を養うことができるようにする。」ことが示されている。

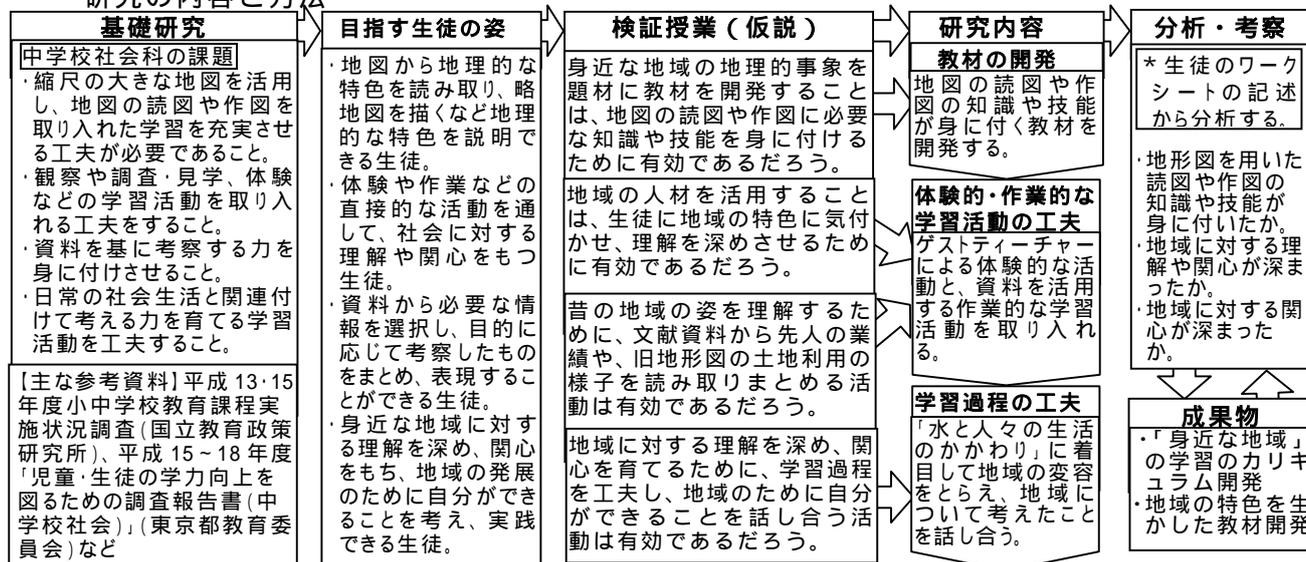
社会で生きるために必要な基本的な知識を身に付け、よりよい社会を築く生徒を育てることが、中学校社会科に求められている。

そこで、本研究では「身近な地域」の単元の学習において、生徒が実生活と関連付けながら、地図の読図や作図などの地理的な知識や技能を身に付け、生活している地域の伝統や文化に触れながら、地域に対する理解を深め、関心をもつ生徒を育てることを目指した。そのために、地域の特色を生かした教材を開発するとともに、単元の目標に迫る効果的な学習活動を明らかにしたカリキュラムの開発をしたいと考え、本研究主題を設定した。

2 研究の仮説

身近な地域の学習において、地域の特色を生かした教材を活用して学習活動を工夫すれば、地域に対する理解が深まり、関心をもつ生徒を育てることができるだろう。

研究の内容と方法



身近な地域の学習において、地域に対する理解を深め、
地域に対する関心をもつ生徒を育てるための学習活動の工夫

1 基礎研究

中学校学習指導要領解説 - 社会編 - の「指導計画の作成と内容の取り扱い」では、これまでの中学校社会科の学習は、「知識に偏り過ぎた指導」になることが課題であったと指摘し、「適切な課題を設けて行う学習を一層充実させる」、「資料を選択し活用する学習活動を重視する」、「作業的、体験的な学習の充実を図る」などによる授業の改善を求めている。

また、「児童・生徒の学力向上を図るための調査報告書」(東京都教育委員会)によると、基礎的・基本的な知識や技能を実際に活用する力の育成が課題であり、国立教育政策研究所の調査においても、観察や調査、見学や体験などを取り入れた授業の改善等が十分に進んでいないことが明らかになった。これらの課題の解決に向けて、カリキュラム開発の重点を下記のように設定した。

身近な地域の地形図と地域の特色を実生活と結び付けて確認できる教材を開発し、読図や作図の知識や技能を身に付けさせる活動を展開する。

ゲストティーチャーを招いた体験的な活動や、先人の業績等について書かれた文献、旧地図などの資料を活用して、生徒が地域の特色を理解するための作業的な活動を展開する。

地域のためにできることを考えることを通して、生徒が先人の業績や過去から現在に至る地域の変容を理解し、地域に対する関心が育つような学習過程を工夫する。

2 授業研究

青梅市は山地や河川など多様な地形が見られる地域である。生徒の生活している地域は、多摩川と霞川にはさまれた武蔵野台地の西端にある扇状地という地理的な特色と、「水を得にくい」条件を克服して地域を開発した歴史的な特色がある。

(1) 地域の地理的な特色の理解に必要な知識や技能が身に付く教材の開発

実際に見える景観と地形図の情報を自分の生活に結び付けて確認させることで、地域の地理的な特色を理解することができる考えた。

そこで、「青梅」の5万分の1の縮尺の地形図を活用し、地図の読図や作図に必要な知識や技能が身に付くようなワークシートを開発した。

施設等を限定し、略地図を描く。

地形図の中から中学校の位置を探すとともに、周辺の主要な施設等に印を付けさせ、それぞれを8方位で説明させた。略地図に記入する施設等を限定したので、生徒は地図に表しやすく、教師は定着度を把握しやすい。生徒が、地形図と略地図を比較して方位の確認や実際の距離を求める活動を通して、地図の縮尺を理解させた。

中学校を中心に、東西・南北方向の断面図を描く。

断面図を描かせるために、中学校を中心に地形図の東西・南北方向に補助線を引かせ、等高線の幅や本数によって傾斜や高さが異なることに気付かせた。この作業によって、東西方向では扇状地の扇央部分、南北方向では凹字型の凹んだ部分に中学校が位置することを確認した。

また、断面図の上に土地利用の様子を描かせて、平面的な地形図を立体的にとらえるための作業をした。

(2) 生徒が自分の生活している地域を理解するための体験的・作業的な学習活動の工夫

「身近な地域」の学習は、学芸員の説明による史跡などの見学や地域の人のお話を聞くなど、人材を活用する体験的な活動を取り入れやすい。また、地域について書かれた文献資料が図書館などで容易に入手できるので、資料を基に当時の生活の様子や先人の業績などについて考え、まとめ、発表するような作業的な活動を設定しやすい単元である。

井戸が多い地域を認識するために、ゲストティーチャーのお話を聞く

「この地域の泉になりたい」という思いで中学校に井戸を掘った元校長をゲストティーチャーとして依頼した。江戸初期に開村に努力した先人の存在や、井戸がなければ生活できなかった「水を得にくい」地域の特色を認識させるために、地域の人材を活用した。

先人の業績や地域の変容を理解するために、資料を活用する

ワークシートに、文献資料から読み取った地理的条件を克服して開発した先人の業績や、明治後期の地形図から読み取った当時の土地利用などを記入させた。

それらの内容から、江戸初期、明治及び現在の生活の様子や土地利用を理解させ、それぞれの時代の違いや変化について考えさせた。

(3) 地域に対する理解を深め、関心を育てる学習過程の工夫

ゲストティーチャーのお話や各種の資料を活用して理解したことを基に、「水を得にくい地域」であることを生徒がとらえられるように、「水と人々の生活のかかわり」に着目させ、青梅の過去、現在、未来について考えたり、まとめたりする活動を行った。その後、「これからの青梅のために自分ができること」を一人一人の生徒が考え、話し合う活動を設定した。

この活動によって、お互いの考えを理解し、その良さを認め、自分の考えと結び付けることで、更に自分の考えを高めていけると考えた。更に、生徒が「青梅をよい地域にしたい」と見つけ直す機会を設定することで、地域に対する理解が深まり、関心が育つと考えた。

研究の結果と考察

1 検証授業の結果と考察

(1) 読図や作図の知識や技能を身に付けさせる工夫と教材の開発

中学校を中心に実際の方位を再確認して略地図を描いた生徒、青梅市の東西方向の断面図の描き方を利用して南北方向の断面図を描いた生徒が多かったことが、ワークシートの記述から分かった。そして、南北方向の断面図に土地利用の様子を記入したことで、「青梅は真ん中に学校などが多くて、まわりを山に囲まれているのが分かった。」と記述した生徒もいた。

これらの学習活動を通して、多くの生徒が方位や位置、実際の地形、土地利用などを、生徒の実生活と結び付けて地図の情報を確認できたことから、読図や作図に必要な知識や技能を身に付けるために、身近な地域の地形図を活用することは有効であるといえる。

(2) 地域を理解するための体験的・作業的な学習活動の工夫

ゲストティーチャーのお話

ゲストティーチャーのお話を聞いて、生徒は「今まで井戸はあまり興味はなかったが、これからも井戸を大切にしていきたい。」と感想をもった。生徒は、ゲストティーチャーの地域への思いと地域を開発した先人の努力を重ね、更に、中学校の井戸から地域の井戸の存

身近な地域の学習において、地域に対する理解を深め、
地域に対する関心をもつ生徒を育てるための学習活動の工夫

在に視野を広げることで、地域の特色に気付くことができたといえる。

開村当時の先人の姿と明治時代の地形図

生徒のワークシートには、文献資料や明治後期の地形図の読み取りを通じて、「なぜ新町とこの地域の名前が付けられたのか文章を読んで理解した。新町にこんなに歴史があるとは思っていなかった。」「昔の地図と今の地図を見比べるとここまで違いがあるとは、少しびっくりした。」と感想が書かれていた。また、多くの生徒が地形図から当時の土地利用の様子をとらえることができた。これらのことから、地図の読図など、前時までの学習を生かすとともに、地図を用いて、地域に対する理解を深めることができたといえる。

しかし、地域の先人の業績を学ぶための資料は、生徒にとって高度な文章であったため、資料の中から要旨を抽出するなど、生徒の発達段階に合った提示方法を検討する必要があった。

(3) 話し合い活動によって引き出す地域に対する関心

「水と人々の生活のかかわり」に着目させながら、単元のまとめに取り組ませたことで、地域の特色を具体的にとらえられるようになった。「これからの青梅のために自分ができること」を考え、話し合う活動の中で、「自然を壊さない」と考えていた生徒が、他の生徒の「工業をさかんにしたい」という意見を聞いて、「工業化は賛成できない」と、自らの考えを再構築していった過程が、ワークシートの記述にみられた。

このように、生徒は他者と考えを共有したり、他者の意見に共感したりしながら、複数の視点から地域をとらえる中で、新たな関心をもつことができた。

したがって、話し合い活動は、生徒の学習を深化させるのに有効な活動であったといえる。

2 研究の成果と課題

この単元の学習を通して、生徒の感想に「地域を大切にしたい」という考えが多くみられるようになった。また、「他の地域を調べてみたい」という学習意欲が高まった生徒もみられた。

地域の地理的な特色や歴史的な特色などを具体的に理解することは、地域に対する関心を育てるために効果があったといえる。

一方、生徒のワークシートを分析した結果から、地図の読図や作図に必要な知識や技能が十分に身に付いていない生徒がいることが分かった。方位の確認や略地図を描くなどの学習で個別指導を行い、地形図から情報を読み取ることに慣れさせる必要があることが分かった。

今後の課題

生徒が自分の生活している地域に対する理解を深め、関心をもち続けるための工夫が必要である。他の単元で地図の読図や作図の知識や技能を生かす工夫や、地域の歴史に対する理解を深めるための工夫をするなど、地理的分野、歴史的分野でも学習できる「身近な地域」の特色を生かしたカリキュラムを作成していくことが今後の課題である。

図1 「これからの青梅のために自分ができること」を考えた生徒の記述

地域に対する自分の考え

・たった100年で、青梅の自然が減ってしまった。これからも、住宅等で自然が消えていくと思う。だから、これ以上自然を壊さないために、ごみ等を減らす努力をしたい。

友達の考えを聞く

・工業をさかんにしたいという意見があった。たしかに工業も大切だけど、工業のせいで壊れている自然もあるからあまり賛成できない。

友達の考えを聞いて考えたこと(自分の考えを深める)

・みんな青梅の歴史を残していきたい、青梅のことを大切にしたいという気持ちはみんな一緒だった。